謙屢觀二白芙蓉一。更欲レ觀二紅芙蓉一。每旦早起。或坐レ堂。或上レ閣。而凝望。則雲鎖烟遮。終不レ能レ觀。是爲可レ恨己。」蓋謙此行。屬二草木向榮之時一。至下於涼風繁陰。紅葉皎月與中夫寒濤雪岳。光景超忽。千態萬狀者上。皆未レ及レ觀レ之。不二獨紅芙蓉而已一。佗日重追陪記レ之。未レ暮也。

中洲曰、杜詩所レ謂海月生二殘夜一者、

鳳洲曰、此景、前人未二道破一、

雨亭曰、以一恨事成レ倍、更推二開一步一、情景兩有二不盡之妙一、與柳子石澗記結法、相似、

中洲又曰、十記、每篇叙法變化、是眩惑人目、而文線則處々出沒、以レ一貫レ之、猶下龍雲變幻不レ可レ測、而爪鱗隱見、以二首尾一相應上、不レ負二龍雲莊記一、

鳳洲又曰、筆墨精到、毫無二遺漏一、讀二此十記一、猶三親睹二龍雲山莊一也、

教育者たらんとする我等

文三　と　よ

「汝は近き未來に於て國民の教育者たらんとするに非ずや。」靜かに己が將來に向ひて思慮したるとき我が耳にはかゝる聲の囁くを覺えて、轉た其の任の大なるに平然たる能はざるなり。

それ世は今や數星霜の爭鬪をおさめて、こゝに始めて靜かなる冬をむかへんとせり。四歲にわたりたるこの大戰に於て湮滅したる生命や果して幾何。死するものは死し、亡ぶるものは亡び、今や交戰國の生面は、こゝに新しき期にむかつて展開せんとせり。而して數年にわたるすべての犧牲は交戰國民をして新しき生涯に入らしむべき大なる能力を生ぜしめたり。彼等はこれによりて新しく生くべき世界の如何なるものかを知り、且つそれに向つて自ら如何に生くべきかをも知れり。疑ひもなく有形無形のものに於きて過去四年間の消耗は、彼等に對して少なからざる疲勞と打擊とを來したりとはいへ、されど將來に於ける彼等の恢復は更に恐るべきものなる事を忘るべからず。

されば今日は我等の袖手傍觀すべきの時にあらず茲に於て教育者たらんとするもの、其の責の大にして且つ重なるを覺えざる能はざるなり。一國の盛衰は教育に俟たずして何にかまつべき。教育の善否は其の國勢を左右して餘りあり。國民の明晰なる頭腦と確乎たる自覺の上に立つは世界的存在の第一義ならずや。見よかの獨逸を。彼にしてもし國民に自覺あらざりせば、いかでかゝる長年月に亙り、その活動をなし得んや。彼等は個人主義なり。されど共に彼等は彼等の自己尊重、換言すれば彼等は自ら自己の價値を認めたり。彼等の擧動は各、自發的にて、其の發するところには明かに强き自覺あり。即ち彼等は科學的基礎の上に立ちて、十分に其の能率を發揮したり。これ皆教育の結果にあらずして何ぞや。

あゝ、我等は如何なる覺悟をもつてこの教育てふ重くして大なる事業を擔ひて立たんとせるか。世は益々我等に大なる要求を以て待たんとせり。我國が今日列國の進步發達に後れず、且將來に於いに爲すあらんとせば、教育事業に從事せんとする我等も大

いに自重し、大いに努むるところなかるべからざるなり。

山東旅行記

七月十一日

今度我が校に於ては、はる〳〵と極東の要鎮たる支那山東の一隅を訪問して、大勢の轉回圖を一眼の下に眺望し、廣き見聞の中に深く内に顧みようとする大旅行を企てられた。まことに、今は世界を外にして國家はない。我等將來の國民教育に當る者の又ゆくべき旅行ではあるまいか。大きな旅は大きな人をつくる。

いよ〳〵午後八時東京驛出發。一行は矢部先生を團長に二十餘名。

「お身御大切に。」「先生、先生」の聲を後に殘して汽車は徐徐と進んでゆく。いよ〳〵青島旅行の第一歩は初まつた。試驗はすんだばかりで、後には何の物思ひはないし、前には、女ながらも、御國離れて何百里の彼方の地を踏み分けようといふ希望は輝いてゐるし實に我々は意氣揚々たるものであつた。仰げば、空には眉のやうな月が懸つてゐる。青田には蛙の聲も聞える。やうやうに落ちついた靜な心にゆきゝする樣々の思ひ、今更ながら、聖代のかたじけなさ、師の君初め、當局の方々の厚き御心づかひの程を思つては、深き感謝の思ひと共に、我等の責任の重さもひし〳〵と身にしみる。その中に我が家の人々のなつかしさも、淡い淋しさとまつはつてくる。聖人に夢なしといはぬばかりの土屋先生のうまゐ、枕一つにうつら〳〵と兩方から倚り合ふ共同生活、正々堂々たる山川先生のおやすみぶり。眠い目に俵のやうな枕のやりばを持て餘す人、樣々の中に汽車の夜は更けてゆく。

七月十二日

寢苦しい一夜が明けると、又朝の混雜が始まる。名古屋驛の洗面所では、顏の石鹼を洗ひ落さぬ中に發車のベルが鳴る。「山川先生と成田先生のお餅の引つ張り合ひに一同腹を抱へる。こんな賑かな中に、十一時十五分三宮驛に着す。藤林、鈴木、阿部、岡田の卒業生諸氏に導かれて一同神戸女學校にゆく。風はます〳〵烈しく、船はいよ〳〵出ぬ事にきまつ

た。不幸か幸か、一行は此處で懇なる御もてなしに我が家のやうな一夜を過す事が出來た。我等が爲にそろへられた寄宿の方の赤い鼻緒の下駄はいて、溫泉に行つた事も忘れないものである。今朝曉もほの暗い四時といふに豊橋驛で櫻蔭會員の方の御迎へを戴いたのを初めとして、こゝにいまこの御世話をうけるなど、旅に來て、しみじみと、同窓の友の暖さ母校の力の偉大さを知つた。

七月十三日

午後四時出帆の船を待つ間を、神戸市街を見物し湊川神社、須磨寺を訪れて、遠く昔を偲ぶ。關西旅行は半はこした氣もするとの聲も聞える。風が船を止めれば、それを利用してこの見物、自然に打ち勝つ愉快さ限りなし。

何のかんのと手間取つて二時半ランチにあわたゞしく馳せつける。船は日清戰爭に由緒ある西京丸。一同便乘の三等室の吊棚に荷物と共に陣取る。百尺の脊丈に三尺の大井、六尺四方に六人の詰め込みやう。綱を操る音にも、錨をあげる音にも胸はおどる内には人樣々に、それ〳〵の思ひはあふれてゐようけれど外は見渡した所、我々は、穴藏の荷物と同樣にすぎない。出來るだけ安價のうちに航海させようとの親切から三等室は造られ、上等室は之をのぞむものに、相等の賃金を拂はしめるかもしれない。しかし、社會にあの美しい上等室と、この穴藏にゐる人々の別のある事は、目前の事實である。船中は小さな浮世である。浮世はなれて、すべて同じ寄宿舍に、一つ學校に通ふ人ばかり見てゐる目に先づ社會階級の差におどろく。海上は平穩で一同大元氣であつた。人知れず、金盥やお咒ひやと心配した人も、待てば海路の日和かな、とも、案ずるよりうむが安し、とも活然大悟した事であらふ。夜は、蚤取り粉にまぶされて赤毛布にくるまつて寢る。

七月十四日

朗かな夜は大間岬の邊であけた。今朝は宇品に寄港する筈なので、起きるとすぐに上陸の仕度に取りかかつた。食堂は、白木のテーブル、鹽水のやうなねぎのお汁お皿には、鹽鱒を刻み昆布一番美味なものはお茶であつた。やがて蒸氣船で宮島見物にゆく。こゝでこの地名物のおしやもじを、葉書にかへ